

全日本私塾教育ネットワーク

# 私塾ネット広報

<http://www.shijuku.net>

本部事務局

〒173-0005  
東京都板橋区仲宿29-6 ナカジュク内  
TEL 03-3963-5572 FAX 03-3963-2529  
理事長 山口 恒弘

No.3  
平成15年2月5日  
発行

私塾ネットワーク広報部  
〒116-0001  
荒川区町屋4-2-17  
TEL 03-3895-5811  
FAX 03-3895-5825

## 2003年私塾ネットが誕生して 三年目、益々の前進



皆様 あけまして  
おめでとうございます  
旧暦 元旦

全日本私塾教育ネットワークは3年目をむかえます。この3年の間、教育の世界も色々と変革がありました。皆さんも周知の学習要領削減に伴う一連の変化は、子供たちのさらなる学力低下という結果をもたらしつつあります。それをうけての新しい動きとしては、私学の設立基準の緩和の流れの中、文部科学省が最初反対して消えた株式会社の学校設立が構造改革特区で認められるという報道もでてきました。

このような教育環境の変化の中、塾は何をすべきでしょうか。学校で塾の先生の模範授業が行われるといった事もありました。これまで公教育の立場では塾といえば学校より劣るものとされてまいりました。昔を思えば夢のような話です。世の中が戦後教育の崩壊にその建て直しを塾に期待しているのではないかでしょうか。

上記のような状況を踏まえまして、私塾ネットは以下のような目標を掲げて塾業界の発展に努めていこうと思います。

- 組織を強化する。これは紙の上の問題ではなく、一人一人の役割分担を明確にして協力しあう、会員同士のつながりの強化、地域、地域同士、センターと地域の関係を密にする。
- 情報の交換を常に行う。お互いにオープンにする。
- 他団体との協力関係を強める。

塾の経営力の向上と共に社会からの認知につながります。お互いの力を出し合い協力して変革の時代に対応しましょう。

全日本私塾教育ネットワーク  
理事長 山口 恒弘



# センター事務局事業報告

事務局長 仲野十和田

## 1 『私塾ネットセンター事務局通信』No.1～5

ネット化を進める現在、メール、FAX、郵送に分類し、通信等を発送しているが、現在、賛助会員を含め、173名中59名がメール送信可(34%の普及率)。先ずは50%を目指したい。

2002.6.14 2-1号

2002.7.22 2-2号

2002.9.30 2-3号

2002.11.5 2-4号

2002.12.19 2-5号

## 2 センター事務局短信

6月2日(日) 私塾ネット全国研修・設立1周年記念

(サンシャインプリンスホテル:  
池袋)



私学を代表して挨拶する調布中高西村弘子校長

24日(月) 私塾ネット関東役員会(北とぴあ:王子)

30日(日) NPO法人教育ボランティアの会  
主催

生きいきワクワク体験“親子の集い”

(調布文化会館「たづくり」)

7月8日(月) 私塾ネット関東定例会  
(調布学園:佐藤勇治先生塾舎)

10日(水) 第23回私立中学高進学相談会実行委員会

第58回拡大任意団体連絡会  
(市谷)

11日(木) 私塾ネット中国定例会  
(弥生会館:JR広島駅前)



保護者役の立脇先生の質問に答える。左から北川先生、渡辺先生、梶原先生。



右側奥より、菅谷友豊香り、加藤、梶原、谷村、長江、小高、竹内の各先生。

9月5日(木) 第59回拡大任意団体連絡会  
(新宿NSビル)

15日(日) 第22回私立中高進学相談会  
(新宿NSビル)

19日(木) 私塾ネット関東役員会  
私塾ネットセンター組織委員会



平成14年(2002)10月6日(日)研修会終了後、会場を理科実験室と宿泊施設を備えた「ステップ城南ラボ」に移して懇親会が行われた。懇親会で挨拶する瀧井郷ニステップ代表。

(いぶき学院：鈴木正之先生塾舎)

- 10月6日(日) 定例会及び塾訪問研修会  
(ステップ：瀧井郷二先生塾舎)
- 17日(木) 私塾ネットセンター役員会  
(八重洲俱楽部：東京駅)
- 私塾協議会総会  
(東京パレスホテル：東京)
- 27日(日) 私塾ネット関東役員会  
進学情報交換会  
(かんぽヘルスセンター：池袋)
- 11月3日(日) 全塾協全国研修  
(かんぽヘルスセンター：池袋)
- 6日(水) 第60回拡大任意団体連絡会  
私塾ネット組織委員会  
(八重洲俱楽部：東京駅)
- 10日(日) 茨城学習塾共同組合全国研修  
(水戸プラザホテル)
- 14日(日) 私塾ネット関東研修会  
(駒込中高等学校：文京区)



瀧井代表のお話に聞き入る出席者

12月1日(日) 学習塾9団体合同忘年会

(グランドパレスホテル：飯田橋)

- 3日(火) 私塾ネット組織委員会ワーキンググループ  
(いぶき学院：鈴木正之先生塾舎)

- 8日(日) 私塾ネット四国合同研修会  
(古湧園：松山・道後温泉)

- 12日(木) 私塾ネット関東合同研修会  
(中央大学駿河台祈念会館)

- 21日(土) 私塾ネット組織委員会ワーキンググループ  
(滝沢：新宿)

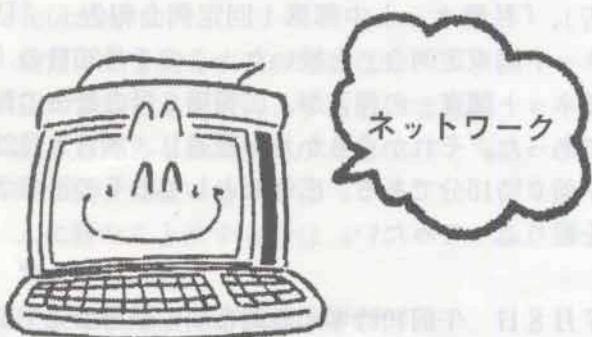
- 1月10日(金) 第61回拡大任意団体連絡会  
(八重洲俱楽部：東京駅)

- 13日(土) 塾に役立つ情報展  
私塾ネット組織委員会ワーキンググループ  
(新宿N Sビル)

- 26日(日) 私塾ネット関東定例会及び新年会  
(埼玉県大宮)



平成14年11月14日(木) 駒込学園において「高等学校推薦制度と絶対評価」について説明する駒込中学校教頭河合孝充先生。



# 広報部より

広報部長 加藤 実

広報部は平成14年5月31日付けで「全日本私塾教育ネットワーク広報」第2号を発行した。

平成14年3月11日(月)、中央大学駿河台記念館360号会議室で行われた、第57回拡大任意団体連絡会の報告がトップ記事で、文部科学省生涯学習推進課室長の佐藤安紀氏や係長の佐藤秀雄氏、社団法人全国学習塾協会会長石井正純先生や専務理事の稻葉先生、全国学習塾協同組合副理事長藤江先生、民間教育連盟会長一色先生や幹事長松田先生、東京私塾協同組合理事長岡田先生、塾全協会長古井先生、塾教育研究会代表の皆倉先生、私塾協議会副会長寺田先生、千葉学習塾協同組合専務理事杉山先生、神奈川民間教育連盟会長中村先生、全日本JJT代表藤原先生、学校外教育研究会本部大沢先生、静岡県東部私塾連盟事務局長野木先生、そして我が私塾ネットから田中・佐藤・西畠・湯口・馬場・碇・山口・仲野・鈴木・立脇・菅谷・谷村・梶原の各先生という塾界を代表する鉾々たる先生方が一同に会して、「学校完全5日制実施等に関する連絡会議」(平成14年2月3日)の補足説明が行われた様子を報告した。

その後に田中先生の「研修部事業報告」、私加藤の「広報部報告」、佐藤先生の「センター事務局事業報告」があり、その後に「エリア代表の声」の第2弾ということで、私塾ネット関東代表の谷村先生の紹介記事、「私塾ネット四国総会および研修会報告」、「私塾ネット中部第1回定例会報告」、「私塾ネット関東定例会」と続いた。この5月20日の「私塾ネット関東」の報告が、広報第2号の最後の報告であった。それから8か月が経過し、本日1月25日午前0時15分である。広報部としてのその後の活動を振り返ってみたい。

7月8日 午前10時半より調布の佐藤勇治先生塾舎「調布学園」において、「私塾ネット関東」の定例会が開催された。佐藤先生が「中学英語」について、私が「中学国語」について話した。

「学力低下」が呼ばれているというのに、塾もその「学力低下」に手を貸していないか。学校の教科書を使い、準拠ワークを使い、定期試験対策をしていたのでは、それこそ学校の補完しかやってないことになる。すなわち「学力低下」そのものに手を染めていることになる。

塾独自の教材、塾独自のカリキュラムが必要である。で、当塾の授業を紹介した。始めに「漢字」である。読みと書き取りを毎週交互に行う。毎回30題前後を学習し、翌週テスト。70点以下不合格で残り勉強。次に「国文法」。テキストはない。板書である。「第1回 単語・文節・文・文章」から。毎週約10分、少しづつ積み重ねていく。3番目は「国文学史」である。「第1回 古事記・日本書紀」からである。書名と作者名が最低条件。生徒の質によって多少教授内容が異なる。4番目に「百人一首」。週に一首ずつ。これも生徒の質によって、内容がことなる。歌の暗記と通訳は当然として、語釈・文語文法・修辞法については年によってかなり異なる。好ましいことではないが、ある程度生徒の質に合わせざるをえない。各5分から10分なので、ここまで20分~40分。毎週1回90分授業であるから、かなり重要視している。中1は後半、教科書の文章を使って、読解練習を行う。あまり細かなことはやらない。一読して全体を把握させる。「何が書いてあったか」「それについてどう思うか」「あなたならどうする」等々。最近、日本語を知らない子が多くなった。語彙力が乏しい。良く考えない。集中力がない。言葉遣いが良くない。つまり「ないない尽くし」である。

一つ一つ積み重ねていくしかない。数学もすべて板書である。基本的にテキストを使わない。例題も、練習問題もすべて書かせる。書くことによって脳に刺激を与える。楽はさせない。自分で自分のノートを作るのだ。参考書を作るのだ。世界に1冊しかない、自分にしが分からぬ解説書である。作図は大変である。しかし、書くことによって理解出来る。テキストを見ながら、「フンフン、分かった」なんて、やっても駄目だ。分かった気になっているだけ。実際は何も分かっていない。

「学力が低下した」などといった、生易しいレベルではない。「やる気がない」・「意欲がない」・「希望がない」のである。またまた「ないない尽くし」である。

教育がそうしてきたのである。なんでも「個性」、

「教育の多様化」、「考える力」、外で遊べと。「覚える」ことは悪だと。東大出てもフリーター。勉強したってたいしたことないと教えてきたではないか。

「知識」を積み重ねたって、そんなもの明日には何の役にも立たない。技術革新の現代。今日の知識は明日には陳腐になると、教えてきたではないか。

「日本はこんな悪いことをしてきた」と社会の教師は教えている。そんなことで、子どもたちが将来に夢をもてるのか。

「女も貴重な労働力」。外に出て働くのが今風の女。キャリアウーマン。で、鍵っ子急増。子育て放棄。自分の人生はおもしろおかしく。子どもなんて生んでられない。で、少子化。今頃になって慌てている。人口が半減するって。そんなことずっと前から分かっていることじゃないか。何も対処してこなかったツケは大きい。

町屋の吹けば飛ぶような小さな学習塾のしがない塾長が、いくら吠えたってたかがしれてる。でも吠えるのだ。一人が吠えなければ二人にならない。

考える力を養うなら学林舎のG Tがいい。「Growing power of Thinking」の略だそうで、国語は文章読解のみ、算数は文章題というか考える問題のみ。漢字や計算の類はない。一冊500円と値段もてごろ。

**6月30日** NPO法人全国教育ボランティアの会主催の「生きいきワクワク体験・親子の集い」に参加。アイスキャンデーづくりと望遠鏡づくりを経験した。大変不器用な私でも、なんとか作れた。こどもたちは必死に、でも楽しそうにアイスを作っては食べ、望遠鏡を作っては覗いていた。「これがケプラー式」、「これがガリレオ式」としっかり勉強もしました。遊んでいるだけではありませんよ。

**7月17日** 中2の保護者の方が手作りパソコンを持ってくれた。私がパソコンを始めるきっかけを作ってくれた。7月20日15インチCRTを15800円で購入。DVDとFDで遊ぶ。

**9月15日** 新宿「NSビル」にて第22回の「私立中高進学相談会」開催。朝8時半から駆けめぐり回る。毎年のことだから慣れたもの。要領はわかっている。お昼まで「中学入試相談コーナー」に詰める。次々と来る。学習の仕方や成績のことならわかるが、部活や運動に関する質問は勘弁して欲しい。音楽系な

ら多少はわかるけど。

**9月22日** インターネット接続。記念すべき日。○○オタクさんがうちに来てくれて、すべてやってくれた。富士通の親指シフトとほとんど同じキー操作のフリーソフト「親指ひゅん」をインストールしてくれた。これでタイピングはばっちり。今までのワープロ専用機とほぼ同じキーポジションで打てる。今までパソコンショップに相談してもどうにもならなかつたことが、いとも簡単に。さすがはオタクさん。

**10月27日** 「進学情報交換会」が池袋の「かんばヘルスセンター」であった。春日部共栄の宇野先生、武藏野の海老沢先生・池原先生・山口先生、洗足学園大学付属第一高等学校の濱田先生・佐藤先生、和洋国府台の太田先生・室岡先生、麹町学園の村中先生・伊藤先生、大成の森先生。去年まではそれぞれの学校の特色を一校約10分程度で話して戴く形式であったが、今年は進学部の方であらかじめ質問事項を用意しておいて、一校ずつ答えて戴く形式となつた。これは良かったと思う。普通の学校説明会では絶対に聞けない内容であったから。教師としてというより、一人の人間としての、生の声が聞けてとても良かった。暴走族上がりの先生がいらしたのには驚いた。そういう先生ならきっと生徒の気持ちをしっかり理解出来ることだろう。

**11月3日** 池袋の「かんばヘルスセンター」で塾全協主催による研修大会が開催された。今年のテーマは「学力低下の現状と教育界の今後の動向」であった。「学力」が低下しているかどうかは、同じ問題でやらなければほとんど意味はない。ところが実際はこれが不可能なのだ。学習していない単元は出題できないからだ。それを恐れずに、同一問題でやれば、結果は一目瞭然である。新しい学習指導要領では学習していない中2「不等式」や「相似」を出題されたら、これからの中2は出来るわけはないのだから。それを「学力低下」とは言わないのか?学習量自体が減っているのであるから、学力低下なのである。手元に中部日本教育文化会発行の「代数基本問題集」がある。そのはしがきに「新制中学校が発足し、あらゆる教科教材が面目を一新してより既に二十年、この間数学教育も実生活に即応し、直ちに日常生活に応用出来る数学をとの目標にしたがい、

新指導方針による教育方針が採択せられたのであるが、今日に及んで未だ所期の目的を達成されないのみか、一部には現下の数学教育は愚民教育の具現であるとの酷評さえ生ずるに至ったのであり、一面今日の生徒諸君の実力をつぶさに検討するとき、過去において、旧制中学の入試程度の問題として小学生間においてさえ易々として解決された程度の問題が、現下の高校入学生諸君に試みるも、なお且つ満足な解答を得るもの極めて少数なりとの結果をみても、この酷評必ずしも故なきにあらずと考慮され、このままにして推移せんか、我が国民未来の知的水準如何ばかりなりやと、寒心に堪えない思いが致すのである。しかば、この現象は果たして何處に起因するのであろうか。これ實に数学教育の本質から遊離し、ただいたずらに実社会の現象にこじつけようとした誤れる教科内容、未だ数学的知識の未熟なる生徒諸君に、生活単元よりするまとまりなき教科書を提供し、整然たるべき数理体系の把握をいたずらに混迷せしめた所以にあるのである。」とある。巻末には「平方・立方・平方根表」、「三角関数の表」が載っている。

著者は加藤周孝。年月日の記載がないので、はっきりはしないが、昭和40年代始めか?

この文章がそのまま、今でも通用するというのは恐ろしい話だ。しかもこの当時と比較したら、今の中学生の学力などは足元にも及ばないのではないか。意気込みというか、意欲がまるで違うのだから。必死に勉強して、一流大学に行き、一流の企業に就職して、いい生活をするのだ、はたまた、博士か大臣かという夢があった。今は何もない。一流大学に入学しても社会で役に立たない?そんな学生に誰がした。教育がしたのである。

**11月14日** 駒込学園において、私塾ネット関東の定例会が開催された。テーマは「絶対評価・推薦入試」についてである。詳細報告はHPに掲載されていますので、そちらをご覧ください。HPを見られない先生で、ご興味のある先生は各エリア代表か、センター事務局にプリントアウトしてもらってください。紙媒体からの脱却ということで、予算が限られておりますので、全会員に配布することが出来ません。

例によって、駒込学園の河合先生が吠えました。最近は(社)かながわ民間教育協会の中村先生や大成の森先生、そして河合先生といらっしゃるので、私は

おとなしく拝聴しているのみです。

公立中に絶対評価など導入したら、大混乱に陥るのははっきりしていた。学力差が大き過ぎるし、成績基準が学校や先生によってまちまちなのだから。レベルの高い私立中は昔から絶対評価であったと思うが、難関の入試をぐぐり抜けてきた粒揃いの生徒対象、しかも、評価は定期試験の得点のみ。他の主観的な要素が入る余地はない。問題レベルも極めて高い。全教科の平均点が60点未満だと落第の私立中学があるが、だから平均点70点前後が団子状態で密集していて、80点以上の優秀な生徒はほんの一握り。そういう中学でこそ、絶対評価は信頼出来る。公立中学などで実施するのは暴挙といわざるをえない。「到達点」がばらばらでは、公平な評価など出来ない。日本全国同一問題で、同時期に実施出来るのなら、それなりに評価出来ようが、そんなこと出来るはずもなかろう。教育は地方自治尊重だそうだから。国としての、文部科学省としての方針も何もないのだから。ほとんど地方にお任せ?

**11月17日** NPO全国教育ボランティアの会主催の「生きいきワクワク体験・親子の集い」に参加。報告書を作成。NPOのHPにアップされているので、詳細はそちらをご覧ください。広島の「山陽女子高等学校」でアイスキャンデー作りとミニプラネタリウム作りを実施。氷は0度と教わったが、実際には0度まで下がらないということを実際に体験し、塩をいれることによって、氷点下21度まで下がるということを目で確認することは、とても大切なことであると思う。ミニプラネタリウム作りは時間が足りなくて、最後まで作ることは出来なかったが、完成品でデモンストレーション出来たのは良かった。イベント終了後、「私塾ネット広島」の各先生方とお会いできたのは嬉しかった。

口下手、社交下手でありお話し出来なかったのは残念であった。今度お会いしたときは、積極的に動こう。しかし、酒飲めないしなあ。

**11月23日** 「日本青年館」で「都立中高一貫校は何を目指すのか」の会合があった。出席の都立高校は小石川高校(偏差値64)、両国高校(同64)、白鷗高校(コース制。文科61、理科65)、都立大付属高校(同57)、武蔵高校(同63)。小石川は旧第4学区のトップ校、両国も旧第6学区トップ校、武蔵も旧第9学区トップ校である。白鷗も旧第5学区の実質

トップ校である。もし、このあたりの学校が学力向上に失敗したら都立高校はさらに凋落の一途をたどる。義務教育だから選抜試験は実施出来ないなどと言っていたのでは、現在の学力水準も維持出来まい。すでにこれらの高校の在校生の間では、「うちの学校、レベル下がるだろうな」と言っているそう。遠慮することはない、力なきものは去れ、でよろしい。「何を目指す」って?そんなもの、進学以外ありえない。まさか就職でもあるまい。キャリアを目指す人材の育成しかあるまい。頭でっかちだけでなく、人間教育もしっかりやってもらいたいが、あまり期待できないか。

「進学」ではなく、最近は「進路指導」と言っているようだが、人を馬鹿にしたような話だ。「君は一流の大学には進学出来ないから、一流企業に就職出来る確率は低い。だから、資格でも取って、自分の進むべき道を模索した方がいい」と言われているようなものだ。まあ、実際、そういうつもりで指導しているから、「進路指導」とは言えないであろう。

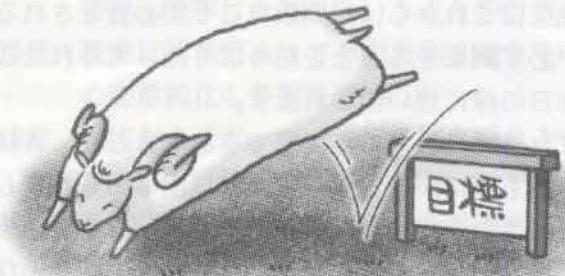
が、良く考えて欲しい。学校の教師が、我々塾の教師が、職業について、どれだけの知識を持っているのか。「花屋さんになりたい」、「ダンサーになりたい」、「保母さんになりたい」、「幼稚園の先生になりたい」、「カウンセラーになりたい」等々の希望や要望に対して、一体どんな指導、アドバイスが出来るというのか。たいしたことが言えないなら、「進路指導」などと言って欲しくない。

また、「ダンサー」になるから、勉強しないでいいということにはなるまい。中学校程度の勉強はしっかりやって欲しいと思う。世の中に出て、恥をかくのはその子なのだから。

「高卒資格」というものは、ほとんど意味のないものになっているが、しかし、だからこそ「高校くらいは」となるのであろう。実際、中卒で受け入れてくれる会社がどのくらいあるのだろうか?知っていたらどなたか教えて欲しい。高卒の就職状況の実際も教えて欲しい。かなり厳しいとは聞いている。しかし、その厳しさを実感出来ないのだ。どういう会社の、どういうポジションに入り、待遇や定着率はどうなのか?不景気だから商業高校や工業高校の方が有利だという考えが主流になっているが、本当にそうなのか?中堅以下の普通科卒業しても、ほとんど就職出来ない?

12月8日 NPO法人全国教育ボランティアの会主催の八戸でのイベントに参加。望遠鏡作りとブーメラン作りを体験。一橋大学大学院教授の中嶋浩一先生、厚木ゼミナールの西畠正夫先生の指導。どこの地方でも子供たちは元気。会場が狭かったこともあったが、熱気でムンムン取材活動もままならぬほどの混雑ぶりであった。ポンドをスーツにべったり付けられて慌てたが。八戸は寒かった。関先生・畠山先生・渡部先生・安藤先生・高橋先生に久し振りにお会い出来て嬉しかった。あまりお話できなかつたけれども。

12月15日 NPO法人のイベントで小豆島へ。藤原真也先生の授業のうまさには恐れ入りました。あんなに上手だとは思ってもいませんでした。怖いことをおもしろおかしく話されます。今度は夏に泊まり込みで参加させて欲しいくらいです。アルコールランプ内のアルコールを机に撒いて火を付ける。ボッパー、ワワー、キャーと。雑巾に硫酸をかける。雑巾から煙が出て雑巾はボロボロに。ライターのガスを瓶にためて、これも机に撒き、火を付ける。ボオッパー、ウワー、ギヤーと叫び声。教科書で「はい、火がつきますよ」よりははるかに勉強になる。そして、ホッカイロ作り。砂鉄と活性炭と少量の食塩水。それを包む紙は企業秘密とか。酸素を少しづつ入れるような紙でないと、反応がいっぺんに起こって、あっという間に、冷めてしまうと。中嶋浩一先生の「天体のお話し」はいつもながらお見事でした。



# 私塾教育の先駆者 西川四郎先生永久の 旅立ちを思って



故西川四郎先生

## 弔 辞

株式会社 育伸社 荏 草 國 光

先生のご靈前に謹んで、心からの哀悼の辞をささげます。

先生との出会いがなければこの学習塾業界に身を投じることがない程 私に深い影響を与えてくださいました。

私にとって先生は人生の師であり父でした。私が先生と出会ったのは四十年前の二十三才の頃でした。その当時、学習塾は今の様に認知されておらずいわゆる透き間産業と世間から蔑視されていた時代でした。当時の私はこの仕事を生涯続けて行く自信がありませんでした。先生と出会ったのは丁度その頃でした。

先生はこれからは民間教育こそが必要とされる時代が必ず到来することを熱っぽく語ってくれたことを昨日の様に想い出されます。

また先生は教育の実践家でもありました。古稀を過ぎても事情がゆるす限り授業に出ておられました特に国語の六書の指導は独特のものがあり深い感銘を受けたのは私一人ではないと思います。そんな訳ですからその後は先生にどんどんのめり込んで行きました。

親子程、年の違う先生をつかまえては失礼な議論をふっかけたのも此の頃でした。しかし先生はいつも激することなく、しかも大まじめに耳を貸し、目を細めて優しく受けとめてくださいました。

今更ながら先生の度量の大きさ寛大な人間性を思わずにはいられません。「教育こそ我が天職、どんな時でも夢を捨てないで苅さんお互に頑張ろう」いつも先生は私を励ましてくれました。

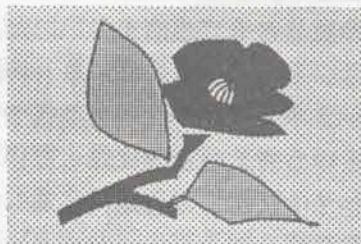
宴会の時は千昌夫の「星影のワルツ」を十八番にしていました。唄う時はいつも歌が苦手の私が引っ張り出されたことを昨日のことのように思い出します。今我々は教育の二〇〇二年という誰も経験していない混沌とした時代に生きています、先生がご存命であればどんな解答をしていただけるのかと思っているのは私一人ではないと思います。でもいつまでも感傷的になるのはやめます。

それは「いつでも胸をはって前へ進め」という先生のお教えにそむくものだと思うからです。先生のお教えを胸に秘めて改めて全力で教育の二〇〇二年問題の解答を出して行きたいと思います。幸いにも先生の遺志を継いだ優秀なご子息の潤、哲両先生もこの業界でご活躍しておられます。先生ご安心下さい必ず乗り切っていきます。

先生のご靈前でいましっかりとお誓い申し上げます。  
どうぞごゆっくりお眠り下さい。

先生 さようなら

平成十四年七月七日



## 弔文

宮崎哲周

西川先生、私たちは一昨年、塾業界の大先輩であり、重鎮でありました高木先生と浅沼先生のお二人を亡くしたばかりであります。今、また斯界の最長老である西川先生とも永のお別れをしなければならない時にあたり、私共皆、深い悲しみに沈んでいます。

西川先生の甥御で、私の高校時代から友人である西川昭司氏に連れられて、九州の片田舎佐世保より上京し、初めてノーリツ学園にたどり着いたのは、昭和32年4月でした。先生始め奥様、おばあさま、家族の皆様に暖かく迎えられ、以来大学を卒業するまでの約8年余り、寝食を共にさせてもらいました。

この間の想い出は数知れず、都立大学駅で降りるたびに、学生時代過ごした街並みの様子が浮かんでもまいります。

日本の私塾発展のため、先生は常に前線に立って東奔西走、いかに努力されたか30年代から70年代にかけての塾関係の先生方には、身にしみて思い出されることでしょう。先生はまた台湾同窓会の幹事として、友の面倒をいかによく見てこられたか身近にいた私にはよくわかります。人を愛し、終生酒を友とされ幾たび飲み交わしたことでしょう。旅を楽しみ、人と交わり、大いに語り合い、本を著し一人何役もの活躍をされてきました。

先生の在りし日の姿を心に刻み、【信歩行來皆坦道】先生の好きな言葉を私もまた信じ、もう暫く歩き続けてまいります。

今宵は七夕、キラ星の如く輝いた先生の生涯、大往生を遂げられた先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。 平成14年7月7日 — 合掌 —



## 偲ぶ

安藤進理

西川四郎先生、はすの花が咲き始めた中をいかにも先生らしく永久の旅路に立たれました。

私が始めて先生とお会いしたのは、昭和38年（杉並私塾会）頃でした。私塾業界が激動していた時代でした。

西川四郎先生の教育に対する心構えは、何よりも塾生に対する愛情とそして教育に対する燃える火の如き情熱でした。教師としてよき授業を展開するた

めの25章を考えて実行されました。

### ◎授業への挑み25章

- 第1章 教育への憧憬、生徒への愛情、これが教育の根源である、心から生徒を愛せよ。
- 第2章 親の気持、子の気持になって、生徒の個性を尊重し左右脳の才能を引き出す努力をせよ。
- 第3章 自分という教師に会えたために自己の個性に目覚める機会を得たと生徒が喜ぶ教師であれ。
- 第4章 生徒から学ぶ師であれ、教えることは習うことであると、自ら反芻せよ。
- 第5章 生徒は全ての個性を持った英才である、それに気付かせる実践が授業である。
- 第6章 どの子の個性も長短相半ばするものである。短は暫く置き、長所を引き出し自信を持たせよ。長所が伸びれば短所は消えてゆくものである。
- 第7章 生徒のため誠心誠意奉仕せよ。そこから生徒も献身するであろう。
- 第8章 教材研究は完璧か。教材の真髓を把握してこそ真の授業が展開できる。
- 第9章 分からせるための授業法の手段を尽くしたか。教材教具の準備は万全か。
- 第10章 教授者の言葉は指導の武器である。正しい発音で、生徒が解かる学年に応じた用語でかんで含めるように伝達せよ。
- 第11章 生徒の学力が向上しないのは、分かるよう教えなかったからだ。こんな反省の上に立って己をかえり見よ。その生徒の全てを知ればそこに分からせる鍵がある。
- 第12章 解法は生徒の立場になって幾通りも指導し、結論的に最上の方途を明示せよ。
- 第13章 生徒の発言を第一にして解明のいとぐちとせよ。
- 第14章 板書は楷書で正しい筆順で濃い目に正しく書け。文字は人なりということを自覚せよ。
- 第15章 授業は講義であってその真義を説きその核心を単純化し多言を慎め。
- 第16章 真実があふれ、ユーモアを持ち緩急よろしきを得た話術を身につけよ。
- 第17章 教室管理、生徒管理は、良き教授人の第一章である。
- 第18章 明窓淨机、教師の心の表れた教室の環境作りに心をくだけ。



平成14年(2002)7月7日(日)鹿嶋市営鹿島斎苑において午後12時30分より故西川四郎先生(元全日本私塾協会名誉会長・私塾ネット名誉会員)の告別式がPTF会員ほか多数の私塾関係者が参列する中で執り行われた。左端は故西川四郎先生がご活躍のアルバムに入った小冊子をご靈前に捧げる佐藤勇治氏。

- 第19章 教師たる者、常に健康に留意し、生徒父母の太陽となれ。
- 第20章 己が先ず学に志し、率先垂範生徒児童の先きに立つ親身の教導に身をささげよ。
- 第21章 生徒に予習復習の手だてを身につけさせよ、これこそ授業を円滑にする基である。
- 第22章 日記、作文を丹念に読んでやり感想を付け加え、宿題は必ず検討、検印してやれ。
- 第23章 一人一人の生徒を長短両面から観察して精細な観察簿を作り、親身なアドバイスを忘れるな。
- 第24章 生徒は父母の宝石であり、教師の宝でもある。このあらたまにどう磨きをかけるかについて、父母との連絡を密にせよ。
- 第25章 御両親に対して教師の透徹した眼を通して育成の灯を明示し教師の誠心誠意の献身で混迷に陥った生徒をよみがえらせよ。
- 以上、先生の記したことばは、今後も残された教師への実践すべき道しるべであります。

西川四郎先生の別の功績は、全国の私塾を統一の方向に進めたことであります。先生は有言実行の士でありました。

真の教育の在り方について多々弁ずるばかりではなく、誰の言葉にも耳を貸す寛容と謙虚さを合わせもつ先生であります。

情熱の人であり、文筆の人でもありました。精神的にも肉体的にもタフさで私塾業界の統一を計り全日本私塾協会の産みの親でもありました。

自然を愛し、人をこよなく愛した先生、人生の道しるべとしていた私にとっても換えがたい大先輩を



左から前列 中川先生、高木先生、高野先生、西川先生  
後列 村木先生、安藤先生、山口先生、石井先生、高野先生

失いました。

神仏を尊んで

神仏を頼らず

指路

西川四郎先生！ 想いはつきません

西川四郎先生のご冥福と、ご家族一同様のご健康と、ご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

平成15年1月10日(金)

## 西川先生の思い出

平林 治

私が西川先生と始めてお会いしたのは日本私学教育連盟を脱退したときのことである。確か神田の飲み屋で東京私塾会を結成しようと有志が何人か集まって議論を戦わしていた時のことであった。このとき以来先生とはしばしば酒を酌み交わすようになったのである。全日本私塾協会の発足の時もそうだった。場所はどこか忘れたが西川先生のご自宅だったことは覚えている。先生は素面の時もそうだが飲むほどに彼独特の教育論を弁じる。どれだけ私の塾教育に役立ったか計り知れない。

私が結婚をしたのは25歳の時で式場は日比谷の東京會館であった。勿論その時は先生を主賓としてお迎えしご祝辞を頂戴した。当時は、塾は藁産業と言っていた時代であった。だから私は妻との結婚を彼女の両親に許してもらうべくお願いにあがろうとした時迷いがあった。当時大学を卒業し就職もしていたが、その傍ら塾も経営していたのでどちらを選択したらいいかという迷いであった。一番先に相談をしたのは現在育伸社の社長で、薊草学院の院長であられる薊草先生であったが後日西川先生にも相談



1991年9月25日 姫路城にて

し、両先生のご意見を参考にさせていただき後者を選択し今日に至っている。

またこんなこともあった。関西から藤原先生が上京したので是非家に来いとの西川先生からの連絡があったとのこと、授業は他の先生に任せ苅草先生と自由が丘（場所は確かではないが）のご自宅へお伺いした。既に西川先生、藤原先生、神奈川の柴田先生、勝又先生が酒を飲みながら教育談義に花を咲かせていたのである。後から参上した私だけは話が高級すぎて議論に加われず、黙ってうまい肴と酒で一人で飲んでいたことを覚えている。

西川先生のお書きになった教育カレンダーでも分かるが、先生の教育に対する熱い思いには感心させられる。先生の教えは勿論だが、先に書いたように私の脳裡には親しく私と飲んでいただいた先生の姿の方がはっきりと残っているのである。

西川先生、あの世でも飲んでいるのですか。しばらくしたら私も行きますのでその時はまた一緒に飲んでください。それまではお仲間がたくさんいらっしゃるのですからその先生たちと飲んでいてください。けっして私を早く呼ばないでくださいね。さようなら



1983年10月1日 甲府・名和温泉への旅

に私も私塾会になじみ、他の団体の方々とも交説を深め、特に関私連の先生方、全塾連の先生方、愛塾協の先生方、他九州の鎌倉先生、広島の山口先生、岐阜の大野先生とも交説を深める様に成り、西川先生とご一緒する機会も多くなりました。特に印象に残っているのは愛塾協の長良川河畔の会合で鵜飼見物、山梨の渡辺の門での2回目の会合の時、先生と二人で参加したりして親しくして頂きました。先生は台湾師範の出であちらの方にも知己が多く「書」の友人も多くあった様です。そんな事から先生の教室で定例会が有った時、少し早めに着いてしまい、二階の教室に行った処、先生は「書」を書いていて少し見させて頂いている中、私も何か書いて貰おうと先生にお願いした処「木下さん、どんなのが欲しい」私はしましたと思いましたね、色々見せて頂きましたが「一笑一少一怒一老」の書が目に止まり「先生この意味はなあに」とやり取りが有り・・・後日この書を送って下さいました。これは今でも私の教室の白板の上に飾っています。塾生には先生の受け売りで説明したりしています。先生は別に「物書き」では有りませんが自費で本を出したりして塾人を啓蒙して下さいました。私も何冊か頂きました。「教育の心を探る」「私塾教育二十年」「今日的私塾とMRA運動」「台湾の教育」等々先生は折に触れるメモを取り乍ら旅をする方でした。先生の特技の一つに、いつでも、どこでも、どんな時でも眠れる、以前渡辺先生の車で安藤・宮崎・西川先生と私とで山梨へ桃が綺麗だから見に行こうと渡辺先生の発案で出かけた時、桃の木の下で、わいわいがやがやワインで乾杯とか言いながら痛飲しました。帰路ぎゅう詰めの車の中、鼾が聞こえて皆びっくり。身動き出来ない車の中でも眠れる。定例会でも眠れる、どこでも眠れる先生の特技でしょう。先生の家の家紋

## 西川先生逝く

### 木下公作

西川先生との出会いは昭和42年7月旧東京私塾会の定例会の席でした。故松永先生の紹介で私塾会に入会するべく見学を行ったときです。会長は故高木先生でした。西川先生はPTFの会長職でした。定例会は活気にあふれ、各塾長の活発な意見と熱気が私に伝わってきて終了後早速入会の手続きをしました。その後は西川先生始め各先生方と交じり合う中



左から谷村先生、西川先生、安藤先生、木下先生

は桔梗だそうで元をたどると土岐源氏から出て明智光秀にきて土佐の坂本竜馬にたどり着くとか、アルコールが入ると良く話して呉れました。特に竜馬が好きでそのことに成るとオクターブも上がる様で機嫌も益々良くなり、先生は「大人」だなあと誰でも思い、そんな事を話題にしたりしていました。特に宴の終わりに皆で肩を組んで「月影のワルツ」をよく歌いましたね♪わかることはつらいけど　しかたがないんだ君のため♪　云々は今ハモルと涙が止まりません。先生のエピソードを思い出したら切りが有りません、先生の逝去の知らせを受けた時一瞬、何もかも止まってしまいました。高木先生の逝去、そして西川先生の逝去と私塾人の重鎮が亡くなられ残念で仕方がありません。先生は塾人に大きな足跡を残して呉れました。本当に有り難うございました。静かにお休み下さい。

合掌



左から西川先生、佐藤先生、清水先生、安藤先生、木下先生、高野先生

それだけに7月6日に先生の訃報に接した時は、高木先生亡き後だけに、私にとっては最後の支えがはずされてしまった様な“虚ろな気分”に陥り2,3日は日常に復帰できませんでした。

業界の集まりが池袋周辺で催された時は、一時期決まって、我が家に一泊され、翌朝入浴後に又一杯と、時に高木先生も加わって、塾教育の在り方を巡って、種々ご教示頂いたことが懐かしく思い出されます。先生との交流を通じて、塾教育に生き甲斐を見出し、天職と定め、毎日を全力で過ごして来られたのも、全く先生の温いご指導のお蔭と深く感謝して参りました。

今でも挫けそうになった時“タカノ、オマエは俺より17も若いんだゾ！少々のことに、へこたれるナ！”という先生のいつもの叱声を思い起こすことがある。

還暦の年。多摩川河口での4級船舶実施試験で人命救助に失敗し、茜色に染まった初夏の夕焼けを背に、多摩川土手を小石を蹴り上げながら帰路についた時、全く突然に“西川先生に会いたい”と奥沢の教室を訪ね、近所の居酒屋で深夜まで話し込み、「秋にもう一度挑戦してみよう！」と奮い立たせて下さったこと節目節目で「人生の深奥」に気付かせてくれたことが多々あった。

局面が否定的となり、落ち込んだりした時などには、特に優しく、温かく包み込んで下さった西川先生、永い間ほんとうにありがとうございました。

何時の日にか、黄泉の国で再会した折りには、“人生とは斯の如きものなりきか”と飲み交わしましょう！

合掌

## 「追悼のことば」

学伸会 高野 泰治郎

私が西川先生と初めて知り会えたのは、昭和45、6年頃、つまり東京私塾会に入会した頃でした。その頃私は“塾は男子一生の仕事となり得るか？”と二葉亭四迷を氣取って、しきりに悩んでいた時期でした。それだけに昭和20年代初頭、終戦直後から英会話学院を創設したり、学習塾を立ち上げたりして“これからは民間教育だ！”と力説される先生は私には、全く新鮮且つまぶしい程の輝く存在でした。

この姿勢は台北師範を卒業され、植民地台湾での教諭体験を通じて、官製教育の行きつく先を、身をもって体験された青年西川四郎先生の自己総括と、私なりに受け止め、爾来今日まで人生の大先輩として私淑してまいりました。

## 西川指路先生のこと

谷村志厚

今私の手元に一枚の書がある。右肩に「献呈谷村志厚様」の為書きがあり、墨痕鮮やかに「勇氣凜々」の四文字がおどっている。左下には「指路」と揮毫されており、この書が故・西川四郎先生の手になるものであることが知れる。「平成二年重陽」と記されていることから、あれから十二年が経過したのだと実感できる。瀟洒な額に収められたこの書は、四郎先生の喜寿の祝いのおりに、出席者全員に配られた直筆の記念の品なのである。

お祝いは東横線都立大前にある先生の塾、東京ノーリツで行われた。ご家族や自塾のご関係者、我々塾団体のお仲間そしてご友人の方々と、会場の本部教室は多数の祝い客であふれていた。そんななか、ひとときも笑顔を絶やさぬ西川先生は、喜寿とはいえまだまだお若かった。私自身もやっと四十に手のとどいた頃であったし、塾界そのものが活気にあふれていた。そんな十二年前の菊薫る季節を、今もはっきりと思い出すことができる。それほど印象深いお祝いであった。

西川先生との始めての出会いは、それより数年さかのぼる昭和六十二年前後であったと記憶する。東京私塾会に入会したばかりの私は、月例の定例会で西川先生と高木先生の両巨頭をご紹介いただく機会をえた。そのときは「何と元気のいいお年寄りだな」と感心する程度であったのだが、その後ご指導をいただくうち、お二人の人柄と功績に深く感銘をうけることになるのである。

西川先生の想い出でもっとも印象深いのは、あれはたしか塾団連の研修会にお供した車中のできごとである。いつものように少々酒の入った座談の席で「私塾とはなんぞや」という議論となつた。当時私は私塾経営にいささかの疑惑と不安をいだいていた。塾は結局のところ「学校教育の補完」にすぎないのではないかと悩んでいたのである。私のそんな趣旨の発言を西川先生はこう一喝された。「教育は民が優先するべきものである。官がこれを独占するとき軍靴の音が鳴り響くことになることを経験的に知るべきである。」なるほどそうか、私塾の本来はそこにあったのか。まさに眼からうろこの落ちる思いであった。この言葉はその後の私の塾経営に、大きな勇気と希望をあたえてくれたのである。

「勇氣凜々」の書は当塾の玄関脇に十年にわたり

掲げられていた。二年前の模様替えのおりに取り外され、ローカーの奥にしまわれていた。この追悼文を書くにあたり、これを取り出し二年ぶりの対面となつた。そしてあらためて「指路」先生のお祝いの会の賑わいと、勇気をいただいた言葉を思い起こした。今日からこの書を再び塾内に掲げよう、そんな決意に至った新年正月の朝である。(平成15年元旦)

菊薫る喜寿の祝いの賑わそり

## 能率指路教育暦

清水塾 清水武夫



- 1 今日も亦 心の鐘を打ち鳴らし  
打ち鳴らしつつあくがれて行く
- 2 意思のあるところ道がある
- 3 たくほどに  
風がもてくる落葉かな
- 4 平常心これ真道
- 5 讓り合えば楽しい人生を我を張り合って  
住み悪くしている
- 6 人生の喜びは仕事を通して  
自己を表現するところにある
- 7 情熱なしで成し遂げられた大事はない
- 8 繼続は力なり
- 9 学問の厳しさに堪え炭をつぐ
- 10 大きな望みを持てば持つほど  
努力が伴わなければ夢に終わってしまう
- 11 人間には心の自由がある。思いを変えて  
行きづまりは打開せよ
- 12 自分が正しいと思っても  
他人の意見は尊重しよう
- 13 現状に感謝できない人は  
環境を変えても不満がある
- 14 省みて直くんば千万人といえども  
我行かん
- 15 教育は心を狭くするのではなく  
広くすることを目的とするものである
- 16 錐きも鈍きも共に捨てがたし  
錐と鎌とに使い分けなば
- 17 人に勝たんと欲する者は  
先ず己れに勝て
- 18 好きな事だけに心を向けるのは  
苦労をいやがる怠け心である
- 19 労せずして得たものは  
あなたを幸せにはしない

- 20 少年よ大志を抱け  
 21 ひとの一生は重荷を負いて  
 　遠き道を行くが如し  
 22 絶対正直絶対無私  
 　絶対純潔絶対愛  
 23 誰かに頼ろうとする心が  
 　自分を弱いものにする  
 24 冬なくば春無きに  
 25 言いわけばかりしていっては  
 　失敗も成功の基にはならぬ  
 26 一笑一少　一怒一老  
 27 努力努力努力が  
 　天才を作る  
 28 子供に必要な苦労  
 　をさせるのは一生の  
 　宝を与えることになる  
 29 気ままや放縱の生活を  
 　自由と間違えていることがある  
 30 深林人知らず  
 　名月来たりて相照らす  
 31 大いなる真昼の夢を見よかしと  
 　生い先長き子等に望まん
- 恩師西川四郎先生が私の進路に「指路」をお与え下され、大いなる真昼の空に旅立たれて本日(平成14年12月12日)で丁度162日経ちました。

指路先生に初めてお会いしたのは、あれは確か三十数年前、東上野の教材会社育伸社さんであったと思います。当時の塾の大多数はお互いに仲間もなく文字通り一匹狼で塾運営をしていました。山田義塾の圭介氏の広告の中の「育伸社の教材、西川四郎先生」という文字を尋ねて育伸社を訪問したときのことでした。

以来、私は「私塾開発協議会」、後の「私塾教育を考える会」、「東京私塾会」、「PTF」の一員として指路先生の薰陶を受け今日に到りました。

先に紹介した「能率指路教育暦」は六十二年に先生から七部頂いて清水塾の教室、事務室、書斎に掲げ毎日塾生、職員、私の家族が日々これを捲り今日一日の指針にさせて頂いております。先生、本当に有難うございました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌



## 指路先生をしのぶ

藤原信

私塾とは――

塾長の人格の発露である

～全日本私塾協会会长 西川四郎～

1975年8月15日

今からほぼ30年前『塾』がまだ若く、どの塾も希望に燃えて、全国的な繋がりをもとうとしていた頃、当時の文部省は『塾』の実態を知ろうとせず、尤もらしい教育を口にしていた日教組は、空理空論と賃金闘争に明け暮れて、おかしな平等論を唱えて無気力な子どもを量産し、犯罪に走る青年たちを作りつづった。だが民間には学校教育予算の3分の1にも満たない費用で、情熱を燃やしつつ生徒指導に昼夜を分かたず奔走する塾長や職員の姿が溢れていた。西川先生のおっしゃる通りである。

時は移り、塾を大規模にやれば経営的旨味ありと、怒濤の如く分教室を作り、生徒数、売り上げと称する授業料収入の多さを誇示する塾、株式上場を得々と語る巨大企業塾も現れた。

今や公教育も、私教育も　金・金・金・・・になりきがった。

バブル崩壊とやらで、塾教育の預り知らないところで日本が駄目になるとと言われて久しい。子どもの躓が悪いから日本は駄目になるなら話はわかる。

だが我々塾から見る限り、子ども達はすべてたくましいのである。よく勉強し、意欲的である。第1に塾の先生が素晴らしい。子どもは主要教科は勿論のこと、芸術・スポーツとか理科実験などでは、飽くことを知らない。かく考えると日本は我々私塾が健全な限り大丈夫であると言って過言ではない。

西川四郎先生の意志は脈々として受け継がれています。先生もって冥されたし。

## 西川先生をお偲びして

興譲館 大嶋志津

“陰矢の如し”と申しますが、西川先生が彼岸への旅立ちをされましてから、早6ヶ月余の歳月が流れました。

私塾界の重鎮、将に「巨星落つ」の感を深めております。今から約30有余年前、関私連の大会があり

ました。西川先生が関東勢の先頭に立ち、ご出席されました。毅然として豪胆、且つ、品格を備えられた先生。これが第1の印象でございました。

その後、東京・名古屋・静岡・横浜・・・と、会が重ねられ、種々の研鑽・研修が相次ぎました。そして、先生方との親睦も深まりました。会合のあとリラックスされると決まって、台北の師範学校時代のこと。また、教鞭をとっておられた御経験等々、教育の本質を確固たる信念のもとに語って下さいました。

軽井沢の別荘へ御招きを頂き、石井会長に案内して頂きました。瀟洒なたずまいが、今でも鮮明に心に刻まれております。東京では奥様を紹介して頂き御一緒に写真に収まったりも致しました。また、時には、ダンスのお相手をさせて頂きましたが、曲がかわってもステップはワルツに決まっており・・・足を何回もギュッと・・・然し、今、そのことまでも懐かしく、かけがえのない体験をいただいた気が致しております。そして心の襞に染み込ませております。

藤原信先生が小豆島へ造られた理科実験研究所は、先生のご厚意により何回となく、全国大会の会場になりました。

型通りの会が終了すると、待ち兼ねたように「宴」が催されました。キッチン・リビング・玄関は、たちまち空瓶の立林です。まるで不夜城となり、教育談論の渦と化していきました。西川先生と藤原先生は昵懇の間柄、お二人でチビリチビリと盃を交わしながら、教育論理を静かに語りつつ・・やがて暁光を迎えたのでないでしょうか。・・・将にこの館全体がヒューマンハーバーとなっていました。すべて今は懐かしい過去の思い出となりました。

生者必滅、会者定離。どの様に御立派な先生でも、命は神のみぞ知らること。今は、ただ生前の御交誼を深謝致しますと共に、先生の御冥福を衷心より御祈念申し上げます。　　合掌

平成15年1月19日

## 西川先生を偲ぶ

山口 恭弘

西川先生との付き合いがはじまったのは、たぶん塾團連の研修会が始まった昭和52年からだと思います。その当時からPTFの創始者の1人ときいていました。最初は私から見れば浅沼先生、恩田先

生より年上で、はるか雲の上の人でしかなく、神様のよう存在でした。何年かたつうちに塾團連の研修会で西川先生の顔を見る事ができた時は、来て良かったという満足感と安心感を持つようになりました。今でも先生の考え方や生き方は、私にとっての大きな指針となっています。昨年7月西川先生の訃報を聞き、もうお会いできないと思うと、心に穴があいた気持ちがしました。ここ数年の間に島本先生、浅沼先生、高木先生、平松先生について、いまの塾世界の土台を築かれた1人である西川先生を失う事は淋しいかぎりです。

悲しんでばかりでは西川先生にすみません。塾を日本の教育の柱になるよう皆さんと頑張ります。それが先生に対する最大の供養だとおもいます。

## 私塾教育の先駆者・西川四郎先生 佐藤 勇治

「全国私塾連盟三十周年恭喜大賀」教育の第一義は獸身を作ることにある（福沢諭吉）

明治・大正の変転は暫くおき、昭和60年の日本の教育を顧望してみても、はっきりすることは、進学態勢、受験教育が主流となり、個性の才能を伸ばし、体力育成を忘れている現状は何としても是正しなければなるまい。私自身の教育遍歴を思い返しても、私の台北師範の同級生40名の生涯を考えても、才能ある多くの級友が病死し、現在の生き残りが半数の20名ばかりである。

以上の文章は、平成2年(1990)12月7日発行の「全国私塾連盟30周年記念誌・あゆみ」に西川四郎先生が特別寄稿として書いて下さった冒頭の一節です。

西川先生77才の時の文です。昭和12年(1937)の日中戦争に続く第二次世界大戦(～1945)を経験された西川先生の世代と、平和の続く戦後の日本とは単純に比較できないものの、平均寿命を考えれば、西川先生が77才の時、台北師範の同級生の方が半数近く亡くなられているという事実は、必ずしも特異な状況ではないかも知れません。しかし、西川先生は、続く文章の中で、若き天才の夭折こそ惜しんでおられます。

少し状況が違いますが、私も最近同じようなことを考えていました。昨年9月29日(日)に、銀座の東京会館で中学時代の同期会がありました。その同期会の席上で開会の挨拶をした松丸道雄氏は、東大名誉教授で甲骨文字研究の著名な学者として現在も活

躍中です。一方、級友の森下氏は東大医学部卒業後、東大の医学部助手となり、アメリカで研究留学中にニューヨークで交通事故に遭い他界しています。森下氏は松丸氏に勝るとも劣らぬ秀才でした。

西川四郎先生が名誉会長の職にあった全日本私塾協会(PTF)と私の所属していた全国私塾連盟(全塾連)とは友好団体として、毎年、合同研修会を開催しており、そのほか塾団体の新年会や懇親会で、西川先生とお会いする機会は数多くありました。しかし西川先生は大先輩であり、親しくお話をするとおり、西川先生が酔うほどに滔々と述べられる教育哲学を、あの細身のどこにあれほどのエネルギーと情熱があるのだろうかと感嘆しながら拝聴しておりました。

晩年は病床にあったと伺っておりますが、私の知る西川先生は、いつも万年青年であり、痩せたソクラテスでした。しかし、88才の天寿を全うされた西川先生は、冒頭の一節「教育の第一義は黙身を作ることである」を自ら実践され、草創期の私塾第一世代の実践的教育者として、私たち第二世代以降の私塾人を育てて下さいました。島本正氏、高木幾二郎氏、浅沼敏夫氏に続き今まで西川四郎氏を失い、第一世代で現役で活躍されておられるのは藤原信先生のみとなりました。第二世代の塾人の一人として、先駆者たちの知的財産をきちんと継承し、次世代にバトンタッチしていくけれど願いながら先生のご冥福をお祈りしております。

**前略** 皆様受験にお忙しい時期に亡き父のための私塾ネット広報誌におきまして、「西川先生追悼号」を発行することになりましたことを心より感謝申し上げます。このようなお心遣いを父も新たな世界にて喜んでいることと思います。どうもありがとうございます。

本来ならば、執筆の皆様にも直接私がご挨拶申し上げるべきことは存じますが、急なことですのでお許し願います。どうか、皆様によろしくお伝え下さいますようお願い申し上げます。

早々

有限会社 ノーリツ学園

代表取締役 西川 潤



## 編集後記

久しぶりの「私塾ネット広報」である。年2回だとだらけてしまう。5月に発行した時点では次は来年の2月。それまで、報告書をまとめて発表する場所がない。で、何も書かなかった。6月2日の総会や研修会、9月19日の関東役員会報告等大事な会合だったのに。

しかし、佐藤勇治先生や田中敏勝先生の依頼で、「学校教育支援調査会」の「小・中学校設置基準」の報告書、6月30日のNPO主催の調布でのイベントの報告書、「教育改革討論会」の報告書、そしてNPOイベント広島・八戸・小豆島への参加と報告書作成（広島は終了、八戸は現在作成中。小豆島はこれから）と大忙しだった。佐藤先生や田中先生、中嶋先生、西畠先生と行動を共に出来て、勉強になった。みんなにボランティア活動等をしていて、よく塾が潰れないなあ、と感心している。我が塾は潰れそうだ。こんな報告書を作成している場合ではない。が、作成している。どの組織の広報委員だかわからない状態であった。

しかし、9月22日のインターネット接続から事情が少し変わってきた。メールで配信出来るようになったのだ。11月14日の駒込学園での研修報告は11月17日・23日・25日に詳細報告を発信。間を置かずに石川先生がHPにアップしてくださった。12月12日の定例会報告も第一報を14日に。HPにアップ。速報の準備が徐々に整いつつある。

問題がある。パソコンのない先生、インターネットに繋がっていない先生に対して、どう速報していくかである。詳細報告なので、頁数が多く、印刷・郵送・FAX等が難しい。とにかく予算がないのだ。ネット化を推進、紙媒体を少なくするなどといった「私塾ネット」の方向性もある。しかし、全員にそれを強要することは出来ないし、ネットの環境がない先生は知らないよ、などということは許されない。人それぞれなのだから。パソコンは確かに便利ではあるが、反面不便なところも多々ある。とにかく時間を取られて困る。

早急に、ネット拡充と速報体制を整える必要がある。3年目に入るのだから。

平成15年1月26日午前1時50分 加藤 実